

所属	言語文化研究科 日本語・日本語教育専攻 修士課程	修了年度	平成 29 年度
氏名	ヴァンナソパー・ポーンミナー	指導教員 (主査)	久保田 美子

論文題目	ラオスの高等教育における日本語読解授業でのストラテジー 教育の問題
------	-----------------------------------

本文概要

1. 研究の背景と研究課題

ラオスにおいて、日常生活では、読むという習慣がまだ根付いていないように思われる。このような状況が、第二言語（外国語）としての日本語を読むことに影響があるのかどうかを知りたいと考えた。また、たとえ読むという習慣がなく、読むことが苦手だとしても、高等教育の学習者に、第二言語（外国語）の日本語読解を向上させる方法を見つけたいと考えた。そこで、まず、ラオスにおける日本語教育の状況、及び、ラオスの高等教育における日本語教育の読解授業に関する状況を検討した。そのうえで、本研究では、ラオスの日本語学習者の読解教育を改善するため、①ラオス国立大学文学部日本語学科の3・4年生を対象に中級レベルの読解をする際の実態を調査し、問題点を明らかにすること、②母語の読解力は日本語の読解力と関係性があるかを明らかにすることを課題として研究を行った。

2. 研究・調査方法

本研究では、ラオス国立大学文学部日本語学科の3、4年生（26名）を対象に、質問紙調査と読解テスト調査を行った。質問紙調査に関しては、回答を得点化し、集計したのちに、因子分析を行った。読解テストは母語（ラオ語）と日本語の2種類の読解テストを行い。その結果を比較し、読解力の関係性を明らかにした。

日本語読解テストで使用した素材（教材）は、対象者が学んでいる場所で扱っていない教材を基にし、また、中級レベルの読解で、ストラテジーに注目しながら授業を進めることを念頭においている教材という理由で『進学する人のための使える日本語 中級（読解）』という教材の中から2種類の本文を使用した。母語（ラオ語）の読解テストは、日本語の読解テストと同様、やや一般的で社会的な内容を含んだものにした。そのため、日常生活でラオス人がよく知っている『マハソン』という雑誌中の本文を使った。

3. 結果の分析と考察

調査結果、およびその分析・考察では、まず、読解上の問題点に関して、質問紙調査の①回答を点数化し、平均値を出して比較した。結果、問題5「慣用句、ことわざ等、特別の意味を持っている表現が分か

らない」、問題6「専門用語がわからない」のポイントがそれぞれ4.19, 4.04と高い値を示した。②回答結果を因子分析した結果、Ⅰ「ボトムアップ式読みへの苦手意識因子」、Ⅱ「文レベルでの理解因子」、Ⅲ「内容把握因子」、Ⅳ「長文因子」、Ⅴ「漢字・語彙力因子」、Ⅵ「段落・副段落レベルでの理解因子」、Ⅶ「内容把握への不安因子」の7つ因子（読解阻害要因）が抽出された。

母語（ラオ語）読解テストに関しては、(1) 学習者の得点（満点6点）が1点から6点満点まであり、学習者間に差があることが分かった。また、日本語テストに関しても、学習者の得点は、0点から11点（満点は13点）まであり、学習者間に差があることが分かった。点数と解答時間の間には関係性がなかった。質問を先に読んだ人が多かった。質問を先に読む人の得点平均値のほうが本文を先に読む人よりも高かったが、有意な差は出なかった。ただし、12点満点中7点以上と点数の高かった学習者（3名）は全員質問を先に読んでいた。分からない漢字・言葉を囲むタスクの結果については、分からない漢字・言葉が多く、点数が低いタイプの学習者が最も多かった。分からない漢字・言葉があっても高い得点を取るタイプの学習者が見られず、推測トラジェジーの使用を観察することができなかった。

母語（ラオ語）読解テストと日本語読解テストの関係を見たところ、相関係数は0.2台で、弱い相関であった。ただし、結果によると、両言語で、筆者の意見を読みとることが苦手だと分かった。テキストの構造から考えると、筆者の意見がどの部分で書かれているかは大体決まっている。しかし、学習者ができないのは、意見の部分を見つけ出すというようなストラテジーを練習することが無いからではないかと考えられる。または、読む際に文と文の関係を意識していないことも考えられる。

アンケート結果とテスト結果を比較したところ、テスト結果は、アンケートの結果抽出された読解の阻害要因の存在を、ある程度裏付けるものであることがわかった。ラオス人日本語学習者にとって、漢字、語彙、専門用語が読解力に関係し、また、接続詞の知識や文法のスキルの不足がテキストの内容理解の阻害になることが考えられる。また、因子分析の結果、文章の中の重要なポイント、読みに自分の知識や考えを入れてしまうこと、読み方の違いを知らないといった項目を含む「内容把握への不安」の因子が抽出されたが、読解テストでも筆者の意見や文章の重要なポイントを訳す問題の正答率が低かった。このスキルを身につけることができるように、どのような読解ストラテジーに注目して教えるべきか考える必要がある

4. 読解授業活動に関する提案

以上の結果を踏まえ、最後に読解授業活動に関する提案を行った。特に、ラオス人の日本語読解阻害要因として抽出された7つの因子のうち、1. 漢字、語彙、専門用語、ことわざなどの語彙力の問題が読解に影響を与えないようにするためには、多読が読解授業に欠かせない活動のひとつになるものと考えられる。多読を練習させると推測法、または、速読スキルも身につけられると考える。2. 内容把握への不安の因子には文章の中の重要なポイント、文章の内容の理解への自信のなさ、読みに自分の知識や考えを

入ってしまう、読み方の違いを知らないという項目が含まれる。自分の理解に自信を持つように、また、理解したことを他人に伝える力や説明するスキルを身につけるように、学習者が読んだものを語る機会を与える必要がある。それには、ペアやグループで読む活動が適切だと考える。今まで総合日本語授業では、本文の精読をよく練習させてきた。中級レベルの日本語読解は精読法も勿論欠かせないと思われるが、精読した後にクラスのともしだちに語ったり、伝えたりする練習も必要性が高いことが、今回の調査結果で明確に示されたと考える。

5. まとめと今後の課題

本研究では、まず、ラオス人日本語学習者の日本語読解の問題点を明らかにし、さらに、母語の読解力は日本語の読解力と関係性が低いことが明らかになった。日本語読解テストで、分からない漢字・言葉を囲ませた結果から、読解ストラテジーの推測法に興味が高まった。今まで、ラオス人（非漢字圏）の日本語学習者にとって、漢字と語彙は同じように覚えるものではないと意識してきたため、その語彙が分かっても漢字で書いたら分からなくて、推測も出来ないことがよくあった。従って、推測法ができるように、漢字指導法も今後考え直す必要があるのではないかと考えさせられた。本研究では、ラオス国立大学文学部日本語学科の学習者が中級になると、日本語読解にどんな問題があるかという全体的な状況を把握することができた。得られた結果は、今回の読解指導法を考える際に有意義なものとなった。しかし、読解上の問題調査は今後国立大学の日本語学習者だけではなく、ラオスにおける全ての日本語教育機関を対象にも行う必要があると考える。調査対象者を広げるだけでなく、因子分析で得られた読解阻害要因を参考にして、対象者に個人別でテキストを読ませ、実際に何が読解阻害要因なのかを観察することが必要である。また、読解テスト後にフォローアップインタビューを実施することでより詳細な要因が明らかになるものと考えられる。さらに、本研究では横断的調査を実施したが、今後は縦断調査も必要だと考える。